

2015年2月12日(木) 19時30分～ イタリア文化会館アニエッリ・ホール

指揮者 アンドレア・バッティストーニ講演会

司会進行：加藤浩子

通訳：井内美香

主催：NPO 法人日本ヴェルディ協会 イタリア文化会館



アンドレア・バッティストーニ：

本日はお招きありがとうございました。

『リゴレット』は、幸いなことに、これまで何度も指揮をする機会が与えられてきました。傑作というものは、自分がその作品を理解をするには時間がかかるものですから、これまで指揮する機会に恵まれていたことがとてもありがたいことだと思っています。

本日は、この『リゴレット』がいかに関傑作であるか、なぜこれほどまでに世界の人々に愛されているのかについて、演奏者のひとりとして、作品を探偵のように深く掘り下げていく過程を通して考えたことをお話ししたいと思います。

まず、ヴェルディはその長い作曲人生において、自分自身の表現を深く追求し、ひとりの作曲家とは思えないほどにその作品が変化していきました。このような作曲家は非常にまれだと思います。

ヴェルディはイタリアの劇場に革命を起こし、新しい道筋を拓きました。彼はイタリアオペラの伝統から出発し、自分のスタイルを変え、全く新しい表現を生み出し、イタリアオペラだけでなく世界の劇場文化のあり方そのものを変えるに至ったのです。

『リゴレット』は、『イル・トロヴァトーレ』、『トラヴィアータ』に続く3部作の最初としてよく語られますが、僕にはもう一つの考えがあります。それは、『ルイザ・ミラー』、『ステッフエリオ』そして『リゴレット』という3部作の到達点である、というものです。なぜならば、この3作においては、作曲プロセスの変化、つまり、ベルカント・オペラのヴィルトゥオーゾ的なものからヴェルディ独自の個性的なものへの変化がみられる、また双方の表現の完璧な拮抗がみられると思うからです。それはときとしてシンボリックでさ

えあるといえます。

『ルイザ・ミラー』では、ひとりの村娘の成長、彼女の物語の進行が、音楽そのものの変化として表れています。『ステッフエリオ』では、ベルカントの伝統的な技法による音楽が、当時の中産階級の保守的な宗教や道徳観を表して、とてもシンボリックな使われ方をしているといえます。



『リゴレット』でも同じことがいえますが、その前に、この作品においてアンチ・ヒーローであるせむし男のリゴレットを主人公に設定した、という点にも注目しましょう。

もともと演劇やオペラの歴史は、古代ギリシア、ローマからルネッサンス、そしてヴェルディの時代に至るまで、美的にもドラマの内容においても、規則や型と

いうものを守ってきました。その型の中で重要なもののひとつが「見た目の醜い人間は悪人である」というものでした。『リゴレット』では、そうしたせむし男が、性格も人間性も決してよいところばかりではないリゴレットが物語の主人公になっているのです。もちろん、このような衝撃的な設定はヴェルディが独自でなしたわけではなく、ヴィクトル・ユゴーの「王は愉しむ」が原作にありました。当時の時代の空気が何か新しいものを求めているといえると思います。ひとりの人間には良いところもあれば悪い部分もある。そうしたものを全て含んだ人間の苦悩を描こうとしているのです。リゴレットにおいては彼の良心は、娘への愛にあります。

さて、『リゴレット』では、ベルカント時代の書法とともにヴェルディの新しい個性的な表現が、暴力的なまでに生々しくドラマティックに表される点において、『ルイザ・ミラー』、『ステッフエリオ』と歩んできたヴェルディの到達点があると思います。このオペラでは、ベルカントの書法がきわめてユニークな使われ方をしています。物語の中で過去が想起されるときに使われているのです。例えば、第1幕、リゴレットがジルダに母の事は思い出させてくれるな、と歌う美しい二重唱がそうですし、ジルダがマントヴァ公爵が扮した男との出会いを思い出して歌う名アリア「慕わしき御名」は、このオペラの中でもっとも典型的なベルカント書法で書かれています。第2幕冒頭のマントヴァ公爵が、ジルダを思い浮かべて歌うアリアも、同様です。これはとても興味深いことです。ベルカント書法を使って表現される「過去」の美しい瞬間と対比させているものこそ、「今」、現実として起きているこの瞬間の——リゴレットが「たった一日でこんなにも変わってしまうなんて」と叫ぶような——ドラマを、より際立たせているのです。

そのようなことがなしえたのも、ヴェルディの作曲技法がこの時期に頂点に達していたか

らといえると思います。幸いなことに、ヴェルディはその後ますます表現技法を深化させていきましたが。ただ、当時すべての人にこの新しい作品が受け入れられたわけではなかったようです。ドイツの批評家から厳しい批評をされたことも残っています。

僕がいつも衝撃を受けるのは、第1幕の終わりです。ジルダの「慕わしき御名」は、先ほども言ったように、美しくシンプルで馴染みやすいメロディで書かれています。これは、それまでの多くのオペラで書かれてきた「愛」や「夢」を歌うのと同じように、型どおりの典型的な書法のもので、ヴェルディの高いオリジナリティがあるものではありません。普通の作曲家であれば、ジルダの最後のカデンツァが終わって大拍手となったことでしょう。しかし、ヴェルディは自分の書いたものがなんであるかをよく知っていました。彼はアリアの終わりから次のシーンへと続くよう緊張感を高めていきます。葬送の行進のようなティンパニにつづいて、ファゴットがフルートの上の音を奏でるといふ不安定な音楽を書き、暗く悪い予感を表し、ジルダを誘拐しにきた宮廷の臣下たちの登場を導いているのです。これはほんの一例ですが、このようにヴェルディは、ただ美しい音楽を書いたのではなく、ベルカントの書法をもって美しい幸福がその後汚されていくさまをこそ描くことができたのです。まさにヴェルディが天才であることの一端が見えるところであり……ほんとうに、ヴェルディはすごいですね。



オーケストレーションにも、同じことが言えると思います。イタリアオペラの伝統から出発し、ドイツ、フランスの書法を研究し、自分の個性を発展させていきました。そして、イタリア音楽のオーケストレーションを変えたと言えらると思います。

確かに、ある時代のヴェルディは、シンプルなオーケストレーションを残しています。し

かし、そのシンプルさがつまらなく退屈なものに聴こえるとしたら、それは、演奏者のせいだといえるでしょう。

先ほどからの話にも通じることですが、シンプルな音楽があるとすれば、ヴェルディにはそれを使った目的があるはずです。なぜそこにその音楽があるのかを考えずに演奏してしまえば、つまらないものになってしまうでしょう。今日も東京フィルハーモニー交響楽団とのリハーサルがありました。そこで楽団の方々と話したことは、ヴェルディのオーケストラの役割をはっきりさせよう、そこに意味を命を与えよう、ということです。アリアや二重唱にオーケストラが参加するのは。「ああ俺たちは歌手のカラオケなんだな」ということではなくて（笑）。

ヴェルディは、その後にプッチーニが続いたように、オーケストラが単なる歌の伴奏ではなく、いかにドラマを伝えられるか、説得力のあるものにするか、いうなれば「歌手たちの言葉で語られていない言葉を、いかに語るか」について突き詰めました。最もシンプルに思えるところこそ、このp（ピアノ）はどう歌うか？このヴィブラートはどうするか？などと、歌手たち奏者たちとともに話しあわなければなりません。この最もシンプルなところに真実で深遠なものが宿るという音楽は、ヴェルディはモーツァルトから学んだと僕は思っているのです。

『リゴレット』でいえば、モンテローネ伯爵の声は、『ドン・ジョヴァンニ』の騎士長のそれと比較してみると興味深いと思います。そして、第1幕のマントヴァ公のパーティーの場面で、弦楽器のみのバンダ（舞台袖で演奏する器楽アンサンブル）があるのですが、その音楽は、彼がモーツァルトやハイドンの弦楽四重奏曲から吸収したものではないか、と僕は考えます。ヴェルディが後半生を過ごしたサンタガタの邸宅に行ったことがあるのですが、そこにはたくさんのモーツァルト、ハイドン、ベートーヴェンといった古典派と呼ばれる人たちのスコアが所蔵されていました。

今回のパルマ王立歌劇場のプロダクションについて



昔のイタリアの歌劇場の伝統的な、まさにメイド・イン・イタリアーの最高の舞台がやってきます。ただし、イタリアオペラの美しさは守りながらも、それを博物館のようなものにしてしまっははいけません。今、日本の歌手の皆様と取り組んでいることも同様です。楽譜に忠実であることはもちろんですが、過去の偉大な演奏から学びつ

つも、新しい自分たちの声、音楽を作っていきたいね、と話しているところです。

『リゴレット』をよくご存知の方なら、慣習的に高音を加えているところがあることもよ

くご存知かと思えます。なぜヴェルディがそう書いたのか、またそれがなぜ伝統的にそのように歌われてきたのかについて、考える必要があります。今回、たんに音楽を派手にする効果を狙うだけのものはなくしてしまいました。また、ヴェルディが意図した音楽やドラマを補強するものであれば、今回も採用しました。短い例をあげましょう。第2幕最後の2重唱の直前にリゴレットが歌うところは、ほとんどの演奏で高音が加えられていますが、僕はそれはしないほうが良いと思っています。なぜなら、もともと書かれたこのメロディは、あたかもライトモチーフのように、このオペラのシンボルであるともいえる「呪い」のテーマを示しているからです。

日本の歌手の皆様には、僕は大きな称賛をもっています。一番の長所は、作品に対して非常に深い勉強をされているというところです。音楽的、技術的な点だけでなく、その作品のスピリットまで深く理解しようと努めておられます。また、これは日本に限らず世界のどの歌手に対してもいえることですが、今までの偉大な過去のコピーではないものになることが重要です。



終演後のサイン会の様子



写真提供：NPO 法人日本ヴェルディ協会